

# 鈴木麻弓さん初の個展

## 写真が語る女川の記憶

### 25日まで役場で「潮の贈り物」

女川町出身の写真家、鈴木麻弓さん(48)「日本大学芸術学部写真学科准教授」の作品展「The Tides Gift...HOME(潮の贈り物...故郷)」が、町役場ロビーで開かれている。25日まで。8日は「女川、時間の層をひらく」と題した関連イベントがあり、町民が持ち寄った思い出の写真や、かつての女川の記憶を語り合った。

鈴木さんは、驚神浜にあった佐々木写真館の3代目。写真館は、東日本大震災の津波で暗室だけを残して流された。父親で2代目の佐々木厚さん(当時72)と、母親の克子さん(当時66)は津波の犠牲となり、今もなお行方不明のままだ。「故郷とは何か」。そんな問いを抱きつつ、この15年、女川に通っては移りゆく街並みや町民の姿にカメラを向けてきた。女川での初の展示に際し、災害公営住宅が整備された宮ヶ崎地区や養殖漁船のドローン空撮、仮設住



昔の写真を囲み思い出話に花が咲いた



来場者に作品を説明する鈴木さん



15年以上カメラに収めた震災後の女川の写真が並ぶ

宅での桜咲く季節の家」のセルフポートレート写真、写真館跡地でなど16点を厳選した。

8日のイベントは町民有志でつくる実行委主催。町生涯学習センターで開かれた。町民が持ち寄った写真は女川の軌跡そのもの。昭和20年代に撮影された

とみられる熊野神社での氏子の集合写真や、かつておながわみなど祭りで行われていた大きな樽に乗って競漕する「海上コラ漕ぎレース」の様子、震災直前の1月に収めた獅子舞の写真などさまざまな写真が並んだ。

佐々木写真館が撮影した結婚式の写真もあった。持ち主は「こんなところで披露することになるなんて」と照れ臭そうにしつつも、手に取った町民とそれぞれの思い出話に花を咲かせていた。

町内の歌人で祖母の写真などを持参した逢坂みずきさん(31)は「住んでいる場所のこ」としか記憶にないため、他の地区の思い出を聞けてよかった」と語り、感想を「古びたる写真の向こうの思い出を語る女川の人々の笑み」に込めた。

和気あいあいと進んだワークショップを眺めた鈴木さんは「こうして見せ合う機会は少ないだろうが、写真は町の財産だと思う」と話す。その上で「写真館は、町民がお茶を飲み集まって文化的な話題を語り合うサロンのような場所。子ども

のころは外で遊ぶよりそこで話を聞いているのが好きだった。佐々木写真館の復活を感じてうれしい」と喜んだ。ワークショップの様子は鈴木さんのゼミ生らがコラージュ作品として昇華し、ロビーに展示されている。写真展は午前8時半～午後9時。観覧無料。

大川小おかえりP  
命守る思い

未来へ

東日本大震災前に石巻市大川地区で暮らしていた人たちが震災後に交流ができた人たちが

購読・配達のご用命は各専売所へ

- |        |           |
|--------|-----------|
| 中央専売所  | ☎96-95112 |
| 釜田専売所  | ☎96-95112 |
| 湯田専売所  | ☎97-5282  |
| 山手専売所  | ☎23-5380  |
| 女川地区   | ☎93-2752  |
| その他の地区 | ☎95-5231  |